

大石良英墓所・顕彰碑落成式

前山 隆太郎

母に抱かれて片肌を脱いでいるのは五歳の男の子である。まだ童子頭で両側にふさふさとした髪を垂らし、やや左半身に坐っている。少年のあらわになった左肩は、半身のため、正面に突き出した形になり、その手は前に坐っている男にとらえられている。

冒頭の一節は渡辺淳一の「かさぶた宗建」の書き出しである。この物語は佐賀藩医植林宗建が、藩主鍋島直正公より「牛痘苗の取寄方取計らうべき事」の命を受け、試行錯誤の末、牛痘苗の痂屑をバタビア（現ジャカルタ）から取り寄せ、我が子建三郎の接種に成功。嘉永二年（一八四九）八月二十二日、佐賀城本丸奥で侍医大石良英により直正公の世子淳一郎君（四歳、後の第十一代藩主直大公）に接種するまでの苦心を描いている。

吳秀三著「シーボルト先生其生涯及功業」第七十章「門人及び交友―門下として直接教を受けし人々」によれば、「十九。大石良英（□□□□―慶応元年）は佐嘉藩の侍医なり。長崎の和蘭通詞本木昌造の次男にして、佐嘉藩の鍋島山城の侍医たる大石家の養子となるなり。弱冠にしてシーボルト先生の門にあり。」と記載され、末尾には「慶応元年月病みて没す、享年五十許。墓は佐嘉の願正寺にあり。」と記載さ

れている。

本木昌造はシーボルトが長崎に鳴滝塾を開いた文政七年（一八二四）六月九日生まれであり、大石良英が、「本木昌造の次男にして」は年齢的にあり得ず何かの誤記であろう。

願正寺は佐賀市呉服元町にあり、慶長五年（一六〇〇）初代藩主鍋島勝茂公により建立された浄土真宗本願寺派の寺院である。

大庭雪齋（文化二年、明治六年）研究者の東京大学名誉教授古田東朔先生より、二十数年前、義兄の願正寺前住職熊谷勝（釋廣城）氏に「大石良英のお墓が願正寺にあるはずだが」とのお話があった。そして戦後間もない頃の区画整理で、境内北東部に移された無縁仏の合祀墓の一角に大石良英のお墓が発見された。前住職のお話では墓を移した際、手術道具も出てきたそうであるが、戦後間もない頃の事でもあり、今はなくなってしまうとの事であった。

平成十七年四月「大石良英墓所・顕彰碑設立発起人会」が有志の手でようやく結成され、願正寺門徒、佐賀県立病院好生館、佐賀大学、佐賀県医師会などに浄財が募られ、十二月三日に仏式法要での建碑式と顕彰碑の除幕式が挙行された。

新たに本堂裏に移された大石良英の墓碑には屋根と両開きの扉が付いており、基石には「大石」、両扉表には「花菱紋」が刻まれている。扉を開くと正面には右から「孺人北島氏」「大石良英君」「同 スエ」と刻まれ、右扉には右から「大元治一丑二月廿一日」「同明治十三年一月廿二日」、左扉には



写真2 大石良英顕彰碑と制作者成富宏氏



写真1 大石良英墓碑

「嘉永五千子年」(十二月十一日)と刻まれている。(写真1) 元治二年は乙丑の年で西暦では一八六五年であるが、慶応と改元されたのは四月七日であり、大石良英の没年は元治二年で慶応元年ではないことになる。孺人は妻の敬称であるが、スエさんは嘉永五年に亡くなり、北島家から迎えた後妻の方は明治十三年に亡くなられたということであろうか。大石良英の生年については、明治以前の過去帳がなく不明であるが、古田東朔先生の研究では、大庭雪齋より五、六歳年少であり、文化七年(一八一〇)頃と推定されている。

顕彰碑は参道沿いに設置され、幅五十二cm、高さ一・六m。「種痘の先駆者 大石良英墓所」と刻んである。(写真2)

埋込まれたブロンズのレリーフは、日展審査員の佐賀大学成富宏名誉教授が制作されたが、原画は佐賀県立病院好生館所蔵の陣内松輪筆「閑叟公於御前世嗣子淳一郎君種痘の図」である。なお、佐賀県立病院好生館の医療庭園には、平成八年の好生館百周年記念に作成された成富宏教授の「種痘の像」がある。

大庭雪齋と大石良英は、安政五年(一八五八)現在地に移転され「好生館」と命名された佐賀藩医学校で教導方を勤めた。

榊林宗建、大石良英、伊東玄朴らの業績は、安政五年の神田お玉ガ池種痘所へ、明治二年相良知安による大学東校へ、そして明治十年東京大学医学部へと到る近代医学の基礎をな

したものと言えよう。

参考文献

- (1) 渡辺淳一「かさぶた宗建」『長崎ロシア遊女館』講談社 昭和五四年 八七頁
- (2) 呉 秀三「シーボルト先生生涯及功業」柳原書店 昭和五四年復刻版 七一五～七一七頁
- (3) 古田東朔「幕末の洋学者、佐嘉藩蘭学寮の重鎮 大庭雪斎(上)」『葉隠研究』第五三号 平成十六年 五五頁
- (4) 酒井シヅ「佐賀藩の医学」杉本勲編『近代西洋文明との出会い』思文閣出版 平成元年 一四七頁
- (5) 佐賀県立病院好生館『好生館百周年記念誌』平成九年 <http://www.koseikan.jp/>
- (6) 吉村 昭「伊東玄朴」「相良知安」「日本医家伝」講談社 昭和四六年 五五頁 一九九頁
- (7) 深瀬泰旦『天然痘根絶史 近代医学勃興期の人びと』思文閣出版 平成十四年 五二頁
- (8) 鍵山 栄『相良知安』日本古医学資料センター 昭和四八年

例会記録

平成十七年十月例会

平成十七年十月二十二日

順天堂大学医学部九号館二階八番教室

一、甲賀通元『重訂古今方彙』のルーツを探る

鈴木達彦、遠藤次郎、中村輝子

二、明治時代の苦学生 西井格太郎と順天堂医院手術傍観録

西井易穂

平成十七年十一月例会

平成十七年十一月二十六日

順天堂大学医学部九号館二階八番教室

一、近世日本の屍体供養―祭文に書き込まれた腑分の社会的

位置づけ

香西豊子

二、ジェンナー像の種々相

深瀬泰旦

平成十七年十二月合同例会(日本医史学会・日本薬史学会・

日本獣医史学会・日本歯科医史学会四学会合同)

平成十七年十二月十七日

順天堂大学医学部五号館三階会議室

一、星薬科大学創立者 星 一の生涯

三澤美和